

書 評

丸山孝一著

『カトリック土着——キリシタンの末裔たち——』

秀 村 研 二

一般向けに書かれたものとはいえ本書はカトリック村落を抱括的に取扱った初めてのものである。本書の「あとがき」によると著者は1969年よりカトリック村落の調査を行ない、それによる論文⁽¹⁾もある。日本の村落におけるキリスト教を扱った研究としては、明治期プロテスタンティズムの土着化過程を分析した研究⁽²⁾や、迫害下に特異な形で土着したキリシタン（隠れキリシタン）に関する研究⁽³⁾、また相続慣行や儀礼的親子関係をカトリック、キリシタン村落で分析した研究⁽⁴⁾がある。カトリック村落の内的統合性に焦点をあてたものとして野村の研究⁽⁵⁾があるが、本書は文化人類学の方法を用いモノグラフとしてカトリック村落の全体像を描きだそうとしている。中心に取扱われた村落は長崎県上五島町冷水である。

著者は本書の目的を「はじめに」において、五島のカトリック村落の文化を全体としての日本文化の中における部分文化（サブ・カルチャー）として捉え、その現状と社会・文化的変化を明らかにすることとしている。

本書は「はしがき」と次の6章により構成されている。

- I 迫害と殉教のなかで
- II あるカトリック村落の社会と信仰
- III カトリック社会の婚姻と家族
- IV 生活史のなかの信仰
- V 五島カトリック社会の変貌

VI ミヤコへ行く若者たち

I 章は五島カトリック村落の歴史の概説であり、冷水は「ヒラキ」と称されるキリシタンにより開拓された村落であり、その迫害と殉教の中で信仰を保持してきた姿を述べている。

II 章は冷水の概況とその信仰を中心とした村落の姿を述べたものである。本書の中心ともいえる章であり、「信仰のみならず、自治組織、生産活動、社会教育などの信仰生活が同質性ということを中心に、同心円的にくりひろげられているという事実には注目すべきであろう」と述べ冷水の社会の特色をあげている。五島の非カトリック村落と多くの共通の基盤を持ちながらカトリック村落としての特異性を表すものとして「郷」(冷水は一般に冷水郷と称される)の自治組織をあげている。自治組織の役員の中に「宿老」という教会の役員が入っており、活動においても宗教的なものが含まれている。またミサの社会的機能を論じ、宗教教育の問題にも触れており、この章を通してカトリック村落の特異性に重点をおいて記述されており、それはかなり明確に読者に伝えられていると思われる。

III 章は冷水の事例を中心とするというよりはカトリック社会の婚姻と親族の問題と儀礼的親子関係について述べ、それに関して冷水の事例に触れている。冷水に関しては、姻戚関係の機能がかなり強く、双系的観念が強いとし、洗礼における代父母の選択にそれが見られると述べている。また代父母との関係についてのフィリピンやラテン・アメリカの儀礼的親子関係との比較において、水平的社会関係で形成されているとし、その理由としてタテ社会的特徴を欠くことをあげている。また代父母との関係がフィリピンやラテン・アメリカのように密でないことも述べている。著者は以前に、代父母が父系母系両方の親族から選ばれることが多いことから、親族の関係は強化しても親族集団の結合には寄与していないと述べたが、⁽⁶⁾ その点に関して本書では述べられていない。本章で冷水の家族や親族の問題について、具体的な事例を入れて記述がなされたら良かったのではないと思われる。

IV 章は通過儀礼を述べたものである。カトリシズムの儀礼によって個人がカトリックとして社会化されていく過程とその時代による変化の状況が簡単に述

べられている。

V章は上五島町の折島と玉之浦町井持浦の二つの事例によりカトリック村落の社会変化について述べられている。その社会変化は日本のどの村落でも大なり小なり受けた衝撃によるものであり、カトリック村落の特異性だけではなくより多くの要因を考慮に入れなければならないという著者の視点が見られるが、より詳しい記述があれば、冷水との比較がより明確になったと思われる。

VI章は若者の都市への流出とその移動先での信仰維持の問題を扱っている。若者が都市で信仰を維持するためには主体的な努力が必要とされ、そのための教会側の対応について触れられている。VI章の後半において本書のまとめがなされている。それは五島のカトリック村落が、「地域ぐるみの共同体としての信仰体系をもつ」ことにより特徴づけられるが、世俗化現象や価値観の多様化のなかにおかれ、日本の多くの村落と同様に変化しつつある。しかし「カトリック村落共同体においては、教会を中心とする信仰体系が社会的秩序維持の基本的な機能を果たしているといえる」として結論づけられている。

本書は前述したように、冷水の社会がカトリックの原理と日本の多くの村落に共通するものとを兼ね備えているという著者の主張により貫かれている。冷水の文化をサブ・カルチャーとするのは、カトリック全体と日本社会という二つの全体に対する部分という意味として捉えられるが、今後その点に関する研究が進められるよう期待したい。

著者は以前、冷水には伝統的な文化を結合させようとする求心的な力と、非カトリック的要素をも吸収しようとする遠心力という二つの力の存在を考え、求心的な力として地理的同一性、行政区画の最小単位、郷山・磯の共有および共同利用と自治組織、毎週のミサにおける集会、様式化された年中行事と通過儀礼、青年団の組織と活動、親族組織の結合、以上を抱括した心理的一体感をあげ、遠心的な力として行動圏の拡大、価値観の多元化と宗教的関心の稀薄化をあげ、これらは互いに相乗したり相殺したりしているから冷水の社会的構造を正しく捉えるために、「冷水の社会的統合に働きかける正の要因、負の要因の動的な相互作用を現実の過程の中で見出してゆくべきだろう」と述べた。⁽⁷⁾ 本書ではその点に関しての分析が明確な形でなされていないのが残念である。

その意味で興味深かったのは、最近の若者の都市への流出とは異なり、戦時中に家族を単位として北九州に開拓農民として移住した人々が定着し教会を持つに至っているという記述であった。その定着がどのようにしてなされていったかを分析することにより、カトリック村落の社会統合における正負の要因について多くの問題を提供することができるのではなかろうか。評者はまた、社会的、歴史的環境の異なるカトリック村落の比較研究がこれから先になされねばならないと考える者である。いずれにしても本書は従来取扱われなかったカトリック村落について、その特色を示した好著である。

(日本放送出版協会, 1980年, B6判, 222頁, 700円)

<註>

- (1) 丸山孝一「五島カトリック村における儀礼的親族関係の研究」『九州大学教育学部紀要』15号, 1970年, PP. 47—58。
丸山孝一「五島カトリック村における文化の持続性と変化」『広島大学教養部紀要』8号, 1975年, PP. 1—28。
- (2) 森岡清美「日本農村における基督教の受容」『民族学研究』17巻2号, 1953年 PP. 1—14 などがある。
- (3) 古野清人『隠れキリシタン』, 至文堂, 1966年。
古野清人『キリシタニズムの比較研究』(古野清人著作集5), 三一書房, 1973年。
田北耕也「日本の一農村におけるキリスト教の変容」『民族学研究』18巻3号1953年, PP. 1—32。
田北耕也『昭和時代の潜伏切支丹』, 国書刊行会, 1954年。
- (4) 代表的なものとして内藤莞爾『五島列島のキリスト教系家族』弘文堂, 1979年がある。
- (5) 野村暢清「馬渡島集団カトリック研究」『哲学年報』24号, 1962年, PP. 51—86。
野村暢清「集団カトリック研究の一資料」『哲学年報』26号, 1967年, PP. 229—253。
- (6) 丸山, 前掲「五島カトリック村における儀礼的親族関係の研究」, P. 56。
- (7) 丸山, 前掲「五島カトリック村における文化の持続性と変化」, PP. 22—23。